

松井みどりさんのコメント — 近藤亜樹映画 HIKARI について

近藤さんの映画 HIKARI を見てしばらく日にちがたってしまいましたが、フィルムの哲学的な世界観の鮮烈な印象は今も心に鮮明に残っています。

髪の毛という、人の身体の一部であり、一本一本が生え変わる事によってその全体像を存続させていくものありかたは、絶え間ない細胞分裂による組織の破壊と生成の中で持続して行く人間の身体や事物の成長のプロセスを端的に体現しています。その髪の毛に人格を与えて髪の毛の視点からの存在の誕生や消滅がユーモラスに描かれるのと平行して、人間の男女の出会いと愛、死と別れ、霊的再会と芸術的再生のドラマが描かれていくという構成は、アレゴリーとして、とても見事でした。その構成を通して、森羅万象全てのものの成長と存続のレベルにおいて行われている生成変化のプロセスを宇宙の理（つまり、無常）と捉える、仏教的といっても 良い視点が伝わりました。

抜けていった髪も死んだ女性も、変転する世界の中で別のかたちで存在している、という、理論的には理解出来ても感情的に実感しにくいことがらが、アニメーションと実写の組み合わせという、どこか童話的な雰囲気によって存在の二つのレベルを統合させる、近藤さんの手法をとおして、感情的に納得できるものになっていました。この構造があるから、恋人の死によってうちのめされ、生前の彼女の絵をどうしても描けなかった事に絶望する画家が、彼女の存在の持続を実感し、創造の力を取り戻すというクライマックスも、観客が自然に受け入れることのできるものになっていたのでしょう。

勿論、髪の毛の筋ひとつひとつを現す、近藤さんの絵の線の力強いうねりや油絵具の厚み、線が引かれて行くプロセスの生々しい動きを捉えるアニメーションの臨場感などが、髪の毛の擬人化や、芸術家テーマに説得力を与えていたことは言うまでもありません。

あのときお話ししました、「髪の毛の運命を通して無常という概念をとらえる」フィルムの世界観を要約してくれる、道元の「不生不滅」という考え方について、「いつか解説します」と言いつつ、まだお手紙が書けておりませんでした。

「不生不滅」は、般若心経にも登場する、仏教特有の考え方で、道元オリジナルのタームではありません。ただ、それは、道元の哲学書『正法眼蔵』の第一巻、「現成公案」の始めの方で、比喩を使ってわかりやすく説明されています。

その部分を要約すると次のような感じです。

たき木は灰となったのちに再びたき木に戻ることがない。ただ、薪は灰よりも先の様態であるということに固執すべきでもない。薪には薪という存在の個別性があり、灰にはその様態特有の有り様がある。個体の生命は全く同じ形で再生することはない。生は死ではなく、死は生ではない。死も生も、生成変化しながら持続していく宇宙の営みの一部であり、それぞれの時と位をもっている。全てのもは変転のなかで生であり続けることも、死であり続けることもない。ただ、その変化の法の永遠の連続の中に組み込まれている。それは、冬が春へと成長したり、春が夏になったりするのではなく、冬は冬、春は春、夏は夏という個別性をもった様態であることと同じである。

その箇所の原文は次のとおりです：

たき木、はひとなる、さらにかへりてたき木となるべきにあらず。

しかあるを、灰はのち、薪はさきと見取すべからず。

しるべし、薪は薪の法位に住して、さきありのちあり。前後ありといへども、前後際断せり。

灰は灰の法位にありて、のちありさきあり。

かのたき木、はひとりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人のしぬるのち、さらに生とならず。

しかあるを、生の死になるといはざるは、仏法のさだまれるならひなり。このゆゑに不生といふ。

死の生にならざる、法輪のさだまれる仏転なり。このゆゑに不滅といふ。

生も一時のくらみなり、死も一時のくらみなり。

たとえば、冬と春のごとし。冬の春となるをおもはず、春の夏となるといはぬなり。

この発想は、「現成公案」の一番最初のところに出て来た、「諸法の仏法なる時節、すなはち迷悟あり、修行あり、生あり、死有り、諸仏あり、衆生あり」、「万法とも にわれにあらざる時節、まどひなくさとりなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅なし」、「仏道もとより豊儉より跳出せるゆゑに、消滅有り、迷悟あり、生仏あり。」

という、難解な三段論法を使った、仏教の法のありようへの包括的な意見と運動しています。

つまり、要約すれば、「あらゆるものごとや自己の正体が仏の法とともにあると思われる状態のなかでは、人の迷いや悟り、修行や、生や死が在り、悟った人々や、そうでない普通の人々がいる」、「ただ、法は自我の投影ではないゆゑに、万物の営みには、迷いも悟りも、悟った人もそうでない人の区別もなく、生も死もないとも考えられる。」「仏にかなった生き方は、豊かさと貧しさ、有と無の共存（対立）から生まれるから、そこには生と死、迷いと悟りがあり、悟った人々と普通の人々がある」ということ。

ここでは仏の法は、森羅万象の営みと、人間の精神活動との両方に浸透している法則として捉えられています。そして、その法則に従って生きようとする「人間」の世界でも、そのような意志や意図、つまり自我とは無縁と思える事物の営みにあっても、同じ法が働いている限り、人間の感情と非情の事物が共存する世界の中では結局、迷いも悟りも、生も死もある、というのです。

この考え方は、近藤さんの映画が、髪の毛の対話と人間の世界の出来事を並列させながら、ときどき、両者にも関係しながら両者と感情的には繋がっていない、風景や植物だけの場面を組み入れていたこと、そして、終わりに近くなるに従って、人、人成らざるもの、植物などの事象を、ひとつの大きなプロセスのなかに共存するもの、個体から個体への変化を重ねながら持続して行くものとして描いていることによって、良く捉えられていたと思います。

この万物を司る法のありようを一口に言うと、「無常」ということになる——それが、フィルムを見ていて無理なく理解できました。

道元は、さらに、そのように、自我とは関係なく変転していく世界の無常を真理としても、花を愛し花が散ればそれを哀しみ、雑草が生い茂ればそれを嫌うのが人の心であり、無常という真理を受け入れたからといって、世の中の人や事物の個々の営みやその状態への関心や愛着が失せる訳ではない、とも指摘しています。

「しかもかくのごとくなりといへども、花は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり」

その、無常という真理の受け入れが、現象世界への愛や創造への意欲を減退させず、むしろその思いを強くさせていくということも、近藤さんの映画には、情動的にうまくとらえられていました。或いは、むしろそれが、近藤さんが、「髪の毛」と、霊的存在になった純子との対話や、霊的存在との交感を通じた画家の創造などのエピソードを通して伝えようとしていたことだったのではないかと思います。

(2015年4月)

内容の転送・転載については、御本人の許可なく無断で使用されることは御遠慮下さいますようお願い申し上げます。